

〔目的〕近年、合繊和服地には、外観、手ざわりともに絹と見分けがつきにくく、取扱い上も簡便な優れた製品が開発されている、にもかかわらず、合繊は着にくい、和服は正絹に限るとの根強い意見が合繊和服の消費拡大を抑制しているようである。本報は、合繊和服が事実着にくいのか、着にくいとすれば、それは何に起因するかについて明らかにしようとするものである。今回は諸要素の中、裾さばきに関係すると考えられる帯電性についての検討を試みた。

〔方法〕実験 A 人体の歩行モデル装置（腰囲に相当する楕円板の下部に、前後方向に可動する下肢部をセットしたもの）を試作、この楕円板周囲に巾130cm、丈60cmの試料を巻きつけ、着装状態を再現した後、下肢部を5分間手動させたときの帯電量を測定した。測定は集電式電位測定器KS-525型（春日電気製）によった。試料は布地 絹100%、ポリエステル100%（帯電防止加工）同（未加工）の3種、構成は衿仕立の長着と長襦袢、測定部位は左右の裾上10cm、30cm、50cmの6ヶ所、環境条件は、気温20℃、湿度30%、50%である。実験 B 被験者3名の人体着装実験を行った。条件はAと同様である。

〔結果〕①測定位置については、各試料ともに上部より下部の帯電量が大きであった。

②環境湿度が高くなると帯電量は低下した。

③同じ条件下では実験Aの場合、絹>未加工P>加工Pの順に、実験Bの場合、未加工P>絹>加工Pの順に帯電量が大きであった。

④長着と長襦袢の重ねでは、絹より加工P長襦袢との重ねの方が帯電量は低かった。